

「情報メディア論」講義

井上 宏

現代コミュニケーション・ライフ考
～「現実世界」と「メディア世界」のはざままで～

A Lecture on the Life for Contemporary Communication
— in “Real World” and “Media World” —

Hiroshi INOUE

（概要）新しいメディアの誕生は、新しいコミュニケーションの到来を告げる。あまりにも多くのメディアに囲まれて過ごすことになった現代人は、どんなコミュニケーションの仕方をして生活しているのだろうか。「コミュニケーション・ライフ」と「コミュニケーション・バランス」の概念を提出し、「現実世界」と「メディア世界」の間で揺れる現代人のコミュニケーションのあり方を考える。

はじめに

本稿は、私が定年退職を迎えての「最終講義」（2003年1月14日）の記録である。私は、「社会学」と「情報メディア論」の2科目を担当してきたので、時間割の都合で「社会学」の最終講義を先に済ませ、「情報メディア論」が一般公開の「最終講義」となった。「社会学」は受講中の学生ばかりが対象で「笑いの社会学」をテーマとした。「情報メディア論」は、公開であったので、受講中の学生以外にも、私の社会学部時代のゼミ卒業生や大学院の卒業生、友人や同僚の出席があった。進行中の講義の最終回であると同時に、「最終講義」だけを聞いていただく方々にも、一定のまとまりをもった講義となるように考えた。

本稿は、講義のなかで説明の足りなかった点については補足をしているが、講義の内容にそってまとめたものであることをお断りしておきたい。

1) テレビ研究からスタートして

私は、今年の3月末で、関西大学で30年を過ごしたことになる。社会学部で21年、総合情報学部で9年、この間私が担当してきた講義科目は、学部と大学院を含めて、社会学部時代に「放送学各論」「映画学概論」「マスコミュニケーション概論」「テレビの社会学」、総合情報学部に移籍してからは「社会学」「コミュニケーション論」「情報メディア論」というものであった。

私のメディア研究の最初は、テレビ研究であり、テレビを社会的に研究することを目指していた。テレビ研究に当っては、私が13年間、テレビ局において現場の仕事をしたという経験から学ぶことが多かったことは言うまでもない。関西大学社会学部に転職したのが1973年で、学会でのテレビ研究も進みつつあったが、特に「送り手研究」については、成果も少ない時期であった。幸い私は、送り手に13年間身を置いてきたわけであるから、そこでめぐらした私自身の思索を論理化して、私自身のテレビ論が展開できないかと考えた。それをまとめたのが『現代テレビ放送論～送り手の思想』（世界思想社、1975）である。その中心思想は、テレビを「現代のひろば」と位置づけし、送り手を「ひろばの主催者（プロデューサー）」としてとらえたものであった。

テレビ局で仕事をしていて気がついたことは、テレビには、さまざまな人々が入り出りするということであった。老若男女、資産家も貧乏人も、政治家も官僚も、宗教家も教育者も、経営者も労働者も、イデオロギーの対立する団体代表も、いろんな職種の人々が、番組に応じてスタジオに集まるのであった。私は、そのスタジオのあり様を見て、ここは現代の「ひろば」ではないかと思ったのである。

メディアの発達を見ていなかった時代、社会の情報流通の結節点としては、「現実のひろば」が存在した。典型的なひろばとしてよく引き合いに出されるのは、古代ギリシャの都市国家における「アゴラ」である。アゴラにおいて、政治論議から市場取引にいたるまで、と同時にまたお祭り行事から市民の談笑にいたるまで、社会が必要とするさまざまな情報がアゴラに集まり、ま

たアゴラから発信されるというように、アゴラが情報の結節点として機能していた。

現代社会では、最早、「現実のひろば」がそうした機能を担うことは不可能であり、視聴覚メディアとしての電波テレビを想定すると、テレビというメディアは、まさに「現代のひろば」として位置づけしていくことができるのではないかと考えたのであった。

この当時、テレビは新しいメディアであって、テレビとは何か、この新しいメディアで何ができるのか、どんなコミュニケーションを担うのか、と言ったテレビ論議が盛んな頃であった。テレビ最大の特徴は、遠くのを居ながらに見ることができるということ、今起こっていることを同時に目撃できる「同時性」を可能にしたということであった。テレビ局は、ネットワークを組み、全国をカバーし、社会に必要な情報を収集し、編集し、創造し、そして発信をして、現代社会の情報流通を担う大きな拠点の役割を果たすことになった。テレビを社会的コミュニケーションとして考えると、「テレビは現代のひろば」という論理が成り立つと考え、私は「テレビひろば論」を構想した。この考え方は、その後の私のメディア研究に大きく影を落としている。「現実世界」と「メディア世界」を対比しながら考える発想も、この頃に芽生えたわけである。その延長上に、「メディア世界のひろば」を見る視聴者の問題を含めて、『テレビの社会学』（世界思想社、1978）という本を書いた。

2) 1980年代に入って

メディア研究の難しさに、メディアの技術革新が急で、次々と新しいメディアが登場してくるということがある。現状認識なしに研究はあり得ないから、現状把握につとめなければならないが、変化があまりにも早いので、それを追跡するだけでも大変である。しかし、現状認識なしには、研究は成り立たないので、そのことに努めながら何を問題にしていくのかが重要な課題となる。

80年代に入って、「ニューメディア」と称されるものが登場してくる。これまでの「テレビ研究」は、テレビのブラウン管に映る対象を「テレビ」としてとらえておればよかったが、新しくブラウン管に映るものとして、CATVやビデオパッケージ（VP）、衛星経由の番組などが現れてきた。いわゆる「ニューメディア」の登場で、私の研究も従来のテレビに加えて、ニューメディアも対象とすることになっていった。

『テレビ文化の社会学』（世界思想社、1987）では、テレビを「ひろばの論理」から論じると同時に、ケーブルテレビ研究も顔を出している。85年に関西大学の在外研究員として、アメリカのインディアナ大学のテレコミュニケーション学科で学ぶ機会が与えられ、日本より先に行くアメリカのケーブルテレビとテレコムの実状を調査した。ケーブル論考については、『テレビ文化の社会学』に収め、テレコムの社会への浸透については、日本の実情を踏まえながら『テレコム社会』（講談社、1987）という本を書いた。

80年代に入って、ニューメディアの動きが加速する。それまでは、従来のメディア、新聞、テレビ、映画、出版、電信、電話など、それぞれのメディアは、その内側では激しい競争を展開し

てきたが、全体としては、お互いの境界を侵すことなく、棲み分けていた。それが80年代に入って崩れ出すことになる。

80年代に入ると、コンピュータの性能が上がり、小型化し、安くなっていくということで、コンピュータは個人が所有し、個人が使えるようになり、パーソナル・コンピュータ、つまりパソコンの呼称が一般化する。85年に電気通信の自由化がはじまった。コンピュータによる情報処理と通信＝テレコミュニケーションとが結合しだす。この現象はComputer & Communication (C&C) と言われた。

この時代の私のメディアへの関心は、CATVと通信衛星にあった。CATVは、テレビとともに誕生は古く、難視聴の解消を目的に設置され、テレビを補完するメディアとして機能していたが、同軸ケーブルの多チャンネル性を生かして、地元地域に密着した番組の自主制作を始め出して、ニューメディアとして脚光を浴び出した。

私とCATVとの出会いは、1978年（昭和53）に始まった通産省の「ハイオービス実験」の評価委員に加わったときである。奈良県生駒郡東生駒の新興住宅地に、光ファイバー・ケーブルを張り巡らした29チャンネル完全双方向映像システムが設置されたのである。今でこそ、光ファイバーは珍しいものではなくなってきたが、当時は、光ファイバー網で完全双方向システムの構築は画期的かつ先駆的な実験であった。

私の関心は、ケーブルテレビが地域で果たす「ひろば」の可能性であった。新興住宅地であるから、昔ながらの伝統もなければ、人々の地縁的つながりもない。新しいコミュニティ作りにケーブルテレビというメディアがどれだけ寄与できるのかが、私の関心事であった。小さなコミュニティにおいては、人々が現実に行き来する「現実世界」とケーブルが映し出す「メディア世界」とが近い関係としてある。ブラウン管に映る光景や商店や人物は、自分たちの目で確認できる世界であり、また現実に見る光景や商店や人物をブラウン管上に見ることができ、この「現実世界」と「メディア世界」とが相互浸透することで、コミュニティのより一層の活性化が期待できると考えた。

この「現実世界」と「メディア世界」との相互浸透は、私は、都会においても有効なものであると考えた。都心部では、居住と職場は分離、マンション群が林立し、隣は何をする人ぞ、と隣人への無関心が広がり、自らが属するコミュニティへの誇りも帰属意識も希薄化しつつあるのが現状で、そうした中であって、ケーブルテレビが、都市の「ひろば」になることができれば、コミュニティ活性化の有力な道具になるのではないかと考えた。

CATVはまた、通信衛星とつながって、衛星経由で番組を受け入れ、多チャンネルサービスを可能にした。通信衛星3個があれば、地球上の全てがカバーされてしまう。通信衛星は、世界をカバーし、国境を超えて情報の共有を可能にする。衛星テレビが、世界の果てまでを、居ながらにして見せてくれるようになる。そうした技術は、人種・民族の壁を越え、思想信条、イデオロギーを越えて、同じ映像を人類が共有できる、そんな時代の到来を告げるようになった。

現実には、衛星テレビの受信を制限している国もあるが、情報の共有化は、着実に進みつつあ

る。通信衛星のみならず、その後のインターネットの発展は、世界における情報の共有化を加速させている。

80年代を特徴づけたC&Cの現象も、社会の変革を予想させるに十分なインパクトをもった。通信回線と端末機をつないだオンライン・リアルタイムのさまざまな情報システムが誕生した。チケットの購入や銀行のATMサービス、スーパーのPOSシステムなど、VANとかLANとか言われるさまざまな情報システムが現れた。

何しろ、テレコムの特徴は、「時間と距離のゼロ化」にある。これまでの対面型であれば、場所と時間が必要だった。時間をかけて、そこまで出向いて用を果たさねばならなかったが、末端はコンピュータの処理が働いて、間はテレコムが処理してくれる、というわけで、中間にあってサービスをしていた人々や機関が省略されてしまう。「現実世界」の動きが「メディア世界」に移されていったわけである。そして「情報化」が具体的な形をもって社会生活を動かすことになっていくようになった。

テレコムは、発信者・生産者・サービス提供者が、受信者・消費者・ユーザーと直接につながることを可能にする。両者の間に入ってサービスを行う中間業者が省略されてしまう。中間の存在は、新しいニーズに見合った中間サービスを生み出さない限り、使命を終えてしまうことになる。

80年代に、ニューメディアを活用した郵政省の「テレトピア」や通産省の「ニューメディア・コミュニティ」などの構想が、未来型の都市モデルとして打ち出される。この延長上に、今日の政府の「e-Japan戦略」の構想がある。現代社会は、80年代に始まった「テレコム社会」の様相をますます深める社会へと移行しつつあるわけである。

3) 1990年代に入って

1990年代に入ると、「ニューメディアの時代」は、「マルチメディアの時代」と言われるようになる。情報のデジタル化が進むことによって、数えきれない位に多くの新しいメディアおよびメディアシステムが登場するようになった。この時代のキーワードとしては、「デジタル化」を挙げるのが至当であろう。

90年代に入って、パソコンはより高度化し、小型化し、安くなり、ウインドウズ95の登場は、一層の普及を促す。90年代後半から、インターネットの使用が広がり出す。とりわけ注目すべき現象として、携帯電話の普及があった。

各メディアは、デジタル化を加速し、一つのメディアが多機能化し、まさにマルチメディアに変貌していった。現在の携帯電話を想像すればよく分かるところである。

コンピュータを介したComputer Mediated Communication (CMC) の世界が、一段と広がり出した。C & Cがもっと高度化したコミュニケーションと考えればよいだろう。CMCの世界は、テキストや音楽も静止画や動画も全ての情報を自在にネットワークに乗せてしまう。この高度化したネットワーク空間は、私たちが直接対面して暮らす現実世界とは、別なる世界として、「電

子メディア世界」「電脳空間」「サイバースペース」「バーチャル空間」などと呼ばれるようになる。

そうした状況を踏まえて、私は『現代メディアとコミュニケーション』（世界思想社、1998）という本を書いた。新しい本を書く時に、いつも思ったことは、変わっていくメディア状況を追いかけ、それを整理しても、また新しいメディアが登場してくるにちがいないので、データを追っただけでは意味がないということであった。

そのときどきの新しい状況を見落とすわけにはいかないが、メディアがどんなコミュニケーションを生み出し、私達の生活の仕方や仕事の仕方、ひいては社会にどんな影響をもたらすのか、そのことの考察を欠かすことができないと考えてきた。

『現代メディアとコミュニケーション』という本の中で、私は「フレキシブル社会」（flexible society）という概念を提出した。情報化が一層発展を見て、高度化したCMCは、仕事の能率・効率を上げ、大変便利な道具として、役立ってくれるし、私たちはまた役立てようと導入をはかってきた。そして、そうした便利の良い道具を使って、もっと住みやすい社会を作るには、どういう考え方をしていけばよいのかについて考えた。

これまでの工業化社会が作り出した私たちのライフスタイルやワークスタイルを変えて行けないのかという期待である。働く人間は、会社のためにということで、自分の家庭やコミュニティを振り返るゆとりもなく、ただただ働くのに懸命であった。長時間の通勤時間、満員電車、時間外労働、あるいは単身赴任など、個人や家族の生活が犠牲に供されてきた。集団主義、画一主義が私たちを縛ってきた。情報化手段を使って、個人が会社・集団と、もっと柔軟な関係を築くことはできないのだろうか。パソコンや携帯、モバイル端末をいつでも、どこからでもネットワークにつなげて仕事をすることができる。個人は、場所と時間の制約から解放されるわけだから、それで得た自由・時間を、個人・家族・コミュニティのために使うということが可能にならないか。そんなことを可能にしていく社会を、私は「フレキシブル社会」と呼んだ。情報化手段を駆使することで、個人が自由を得て、そして、なおかつ組織・集団としなやかな関係を結んで生きていけるか、という課題である。

今日の流れを見てみると、ますます競争が激しくなり、個人は一層のストレスにさらされているように見える。自由な時間を生み出した人もいるかも知れないが、多くの人にとっては、一層忙しくなったというのが実感かも知れない。情報化を進めることが、住みやすい社会をもたらすことになっていくのか、一層困難な社会を生んでしまうのか、答えは簡単に出せそうにない。私は「フレキシブル社会」の到来を期待しているが、これからの課題として考えておきたいと思う。

4) ブロードバンド時代に入って

2000年頃から、「マルチメディア時代」の言葉に代わって「ブロードバンド時代」ということが言われるようになりだした。端末機器の性能が高度化してきた一方で、回線の容量に問題を抱

えてきたが、21世紀になって回線の容量の革新が進みだした。つまり回線のブロードバンド化である。

2000年に入って、社会の情報化をはかるという目的は、国家戦略の一環となってきた。2000年に「IT基本法」が成立、IT戦略本部が設けられ、政府は2005年に世界最先端のIT国家を目指すと言っている。2005年までに、少なくとも3000万世帯に、数メガビット/秒の高速インターネットを、1000万世帯に、30メガビット/秒以上の超高速インターネットを整備すると言う。

ソフトの製作、パッケージ化、伝送の形態と、全ての過程がデジタル化されるようになってくると、残すところは回線の容量や伝送のスピードということになる。ブロードバンドが注目される所以である。

ニューメディア時代、マルチメディア時代を経てきて、端末装置もソフトも、大体のところデジタル化を終えてきた中で、テレビ放送のデジタル化が一番遅れてきたが、それにも目処がたってきた。政府の発表では、2003年から東京、大阪、名古屋がデジタル化に踏み切り、その他の地方局は2006年に、そして2011年には、地上波テレビの完全デジタル化を実現するというスケジュールが決められている。放送局にあっては、計画通りに進むのかどうかの懸念を抱きながらも、着々と準備を進めつつある。

デジタル化を終え、ブロードバンド時代に入っていくと、どんなことが起こるのであろうか。従来のパッケージ系のメディア、つまり持ち運びしなければならないメディア（新聞、雑誌、書籍、レコード、CD、MD、TVゲーム、ビデオ、DVDなど）も一部は、インターネットに代替される。音楽は既に「音楽配信」があり、ビデオやDVDも「映像配信」で流される。TVゲームも「ネット対戦ゲーム」が可能になる。ラジオ、テレビも一部はインターネット上に乗せられる。電子ブック、メールマガジンなどもインターネットに乗って、ネット上で読まれたり、ダウンロードされたりしている。ストリーミング放送というインターネットの特質を生かしたサービスも生まれている。著作権や料金徴収の方法など解決しなければならない問題があるとしても、従来型のメディアの一部は、インターネット上に吸い取られていく可能性が強い。と同時にインターネットは、インターネットだからこそ可能な新しいソフトサービスを誕生させていく。

これからは、ブロードバンドとしてのインターネットの威力が、ますます大きくなっていくであろうと思われる。情報量の多さ、情報検索の威力、電子メール、チャットや会議室への参加、見知らぬ人との会話、—— 私たちの行動の第一歩は、まずインターネットへのアクセスから始まる傾向を示す。こういう傾向が主流になってくると、インターネット上に顔を出しておかないと素通りされてしまうということになりかねない。インターネット上に顔を出すことが、経済的に負担になるとしても、素通りされては、本体の方の存在が危ぶまれるということにもなりかねない。

CMCの世界を「サイバースペース」と言うならば、私の言い方では「メディア世界」なのだが、生活の中にあって「メディア世界」は、ますます大きな比重を占めていくと思われる。そうした流れのなかで、従来型のメディアは、自らのメディア特性を一層厳しく自覚する必要がある。

ある。どこにスペシャリティーを見いだすか、もしその特性へのユーザー・ニーズが落ちていくとなると、そのメディアは市場からの退場を余儀なくされる恐れが出てくる。

5) 私たちの生活を取り巻くメディア状況

さて、今日の私たちの生活を取り巻くメディア状況を見てみると、従来型のメディアとしては、書籍、雑誌、新聞、地上波テレビ、ラジオ、映画、レコード、カセットテープ、固定電話が挙がるし、それらに加えて、ニューメディア・マルチメディアとして登場してきた、ケーブルテレビ、BS・CSテレビ、BSデジタルハイビジョン、CD、MD、LD、DVD、パソコン、インターネット、テレビゲーム、FAX、携帯電話、携帯端末（PDA）、デジカメ、電子ブック、無線LANなど、数え切れない位に、多くのメディアを挙げることができる。

私たちの毎日の生活は、片方向のメディアであれ、双方向のメディアであれ、これらのメディアに接し、接することを習慣的行動として、生活のなかに組み入れて暮らしている。

新聞なし、テレビもラジオもなし、電話も引かずパソコンも持たず、という暮らし方をするのも可能ではあるが、今は、そのような生活をすることは、実験はできても現実には殆ど不可能と言うべきであろう。

現代人はメディアとの付き合いに多くの時間を費やし、つまり「メディア世界」との接触の時間が多くなって、「現実世界」とかかわる時間が少なくなっているという傾向がある。仕事は、パソコンに向かうことを必須とし、テレビの視聴時間は1日平均で3時間半はあり、歩きながらもケイタイで用を足し、メディアに依存する比重が非常に高くなってきた。ビデオやTVゲームに没頭する人間も珍しくはないし、対人関係では、ますます多くを、ケイタイ、電子メール、インターネットに依存するようになってきた。「現実世界」での活動の多くが、「メディア世界」へと移行しつつあると言ってもよい。

ここで「現実世界」とは何か、「メディア世界」とは何かについて説明をしておきたい。

「現実世界」という言葉で私が意味するのは、私たちが生物としてもつ五感を働かして、直接的に環境を感じ、認識する、つまり全身感覚をもって対象物に接する世界である。メディアが発達を見ていなかった時代は、私たちの生きる世界は、「現実世界」そのものであった。当然のことながら、私たちは空間に縛られ、時間に縛られて生きていた。遠くのものは見えないし聞こえないし、見ようと思えば、そこまで出かけなければならなかったし、遠くへメッセージを伝えようと思えば、時間をかけてそのメッセージを運ばなければならなかった。

メディアが発達を見て、現物そのものではないが、それを複製の形で見たり聞いたりすることができるようになったし、遠くの人々とも自在に交信できるようになった。メディアを介して、間接的ではあるが、見たり聞いたり知ったり、人と出会ったり、取引をしたり出来るようになり、「現実世界」の時間と空間の制約から解放された世界を築くことになった。そういう世界を「メディア世界」と呼んだわけである。

今日の私たちは、この両世界に足をかけて生きているのであるが、80年代以降のニューメディ

ア、マルチメディアの時代を経て、今ブロードバンド時代を迎えて、「メディア世界」の比重はますます高まってきている。直接に人と会って話をし、取引をするというプロセスが、ケータイとインターネット上に移されていく。便利になり、コミュニケーションの能率・効率は上がっていく。そこで気になるのは、「現実世界」のことである。私たちは、生物体として、メディアを介さない関係、他の人間との生身の関係抜きでは生きていけない存在でもある。「現実世界」が直接性の世界とすると、「メディア世界」は間接性の世界である。コミュニケーションの観点からすると、直接的コミュニケーションの世界と間接的コミュニケーションの世界となる。また感覚器官をどれだけ使っているかという観点からすると、その全部を使う「全体的コミュニケーション」と一部の感覚器官を使うという意味で「分節的コミュニケーション」という分け方が出来る。

6) 現代人のコミュニケーション・ライフの特徴

これだけメディアが溢れ、メディアに取り囲まれた生活ということになってくると、どういうメディアとの接触をしているか。つまりどんなコミュニケーションをしているかによって、その人の生活のあり方を特徴づけることができると思われる。

直接的なコミュニケーションが圧倒的に主流であった時代なら、人がどんなコミュニケーションを交わしているかなど問題にもならなかったであろう。メディアが溢れ、間接的・分節的コミュニケーションの比重が高まってきて、人々の生活のあり方の特徴を見届けるのに「コミュニケーション・ライフ」という視点が可能となるわけである。その人がどんなコミュニケーション・ライフを実践しているかによって、その人のライフスタイルやパーソナリティーの形成を考えることができるのではないかということである。コミュニケーション・ライフの特徴を見ていくことによって、現代人の生活や性格を診断することができるのではないかと考えるのである。

さて次に、その現代人のコミュニケーション・ライフの特徴について述べようと思うが、こうした特徴の指摘は、私が学生と接し、また多くの学生諸君のレポートを読むうちに触発されたり教えられたりしたことが多い。私は毎年、「私のコミュニケーション・ライフについて点検する」というテーマで、受講生諸君にレポートを書いてもらっており、その数も何千枚と数えるに至り、まだ整理がついてはいないが、私のような世代と違った特徴について教えられるところが多々あった。

① 「ながら感覚」の一般化

テレビは、わが国に誕生して今年で50年、一日平均の視聴時間が約3時間半、今日もなおよく見られているメディアである。目を覚ませばすぐにテレビ、外出から帰宅すればすぐにテレビ、というようにテレビのスイッチをオンにしてしまう。テレビだけでなく、ラジオのながら、CDのながら、という風に、いつも音や映像を流しておくという「ながら」が一般化している。「ながら」の常態化現象である。

家族の会話でも敢えてテレビをつけたままで、豊かな自然のなかを歩きながらも、ウォーク

マンを身につけるとか、待合室や電車のプラットフォーム、車中などではケータイを見ながらとか、静寂の空間、無為の時間は避けられる。音が無く、人の気配がないとさびしい、不安という声をよく耳にする。静寂や沈黙の空間には耐えられないという感覚が広がっている。

② 「メディア世界」の現実性

例えば、テレビニュース。メディア世界に現れるものは、他者によって切り取られた現実であり、断片であるのだが、それは動かぬ現実として受け取られる。テレビで見たという「事実」を打ち消すのはとても難しい。「そんなことないよ」と言っても「テレビが写していた」と言われれば、そうかなと思わざるをえない。仮にそうだとすると、メディア側に全てをあずけるのではなくて、何か胡散臭いとか、変であるとか感じ取ることがあってよいのだが、そうした感覚はなかなか育ちににくい。

テレビの実況中継だと、現場も現実なら、解説やコメントがついたテレビ中継も「現実」となる。現場に足を運んだ人は少数で、圧倒的に多くの人たちが、テレビを通じての「現実」しか知らないわけで、その「ブラウン管上の現実」が、現実として受けとめられる。

私たちは、テレビというメディアを得て、物事を視覚性の下にとらえることに慣らされてきた。「見る」ということで、リアリティーを感じ、見たから本当なのだと思うようになってきた。政治的イベントを含め、あらゆる出来事が、視覚性の下に提供され、「見た」「見ない」が出来事の存在感にかかわるようになってきた。そうなってくると、テレビに写ってこそリアリティーが持て、テレビに映らなかったら存在しないかのような感覚が生まれかねない。テレビを見て、世界の出来事を認識してきたという若者にとって、テレビの枠組みが認識の枠組みとなってしまうとすると、テレビが写してこなかった世界は、まるで存在しなかったような受け取り方になってしまう。

「メディア世界」は、情報の世界で、現実は何らかの記号によって表される。私たちが身体的にもつ感覚器官、体験的に蓄積した知識よりも、メディアの記号の方が確かさをもってしまう。もっともその記号の背後には、メディアとしての権威や威光、信頼性があることが前提ではあるが、個人の体験や感覚が軽んじられるという結果を生んでしまう。

例えば、食品の賞味期限。これも記号だけを信頼して、自分の鼻で嗅ぎ、舌で試してみるという風に、自分の感覚器官を使うのではなく、書かれた記号を信用して、期限切れであれば何でも捨ててしまう。少しでも自らの経験や感覚器官を動員することがあってもよいと私は思うのであるが、今日の風潮は、記号だけが一人歩きしてしまう。

③ メディア依存の深化

メディアは、その特性を生かして便利だから使われるのだが、それへののめり込みが起こる。古くは、「テレビ中毒」や「ビデオおたく」と言われる現象がそうであったが、それに続いて、テレビゲームやパソコンへののめり込みが指摘されるようになった。最近では、ケータイへののめり込みが話題となる。

ケータイをコミュニケーションツールとして使いこなしている人はよいが、道具としてではな

く、身体の一部になってしまっているかのような人が現れてくる。学生たちの表現を借りれば「用もないのにメールをする」「ケータイを忘れたら、何が何でも取りに帰る」「ケータイは肌身離さず」「ケータイを持っているだけで、友達とつながっているような安心感がある」と言う。これらのコメントからうかがえるのは、ケータイというコミュニケーションツールが身体の一部、あるいは身体に埋め込まれているというような感覚を生み出しているのではないかとと思われることである。

④ 電子情報メディアの比重増大

印刷系メディアよりも放送系と通信系のメディアの比重が増してきている。とりわけ顕著なのは、ケータイの普及とブロードバンド（ADSL, FTTH, CATV方式）使用のインターネット利用を上げなければならない。ケータイも音声よりもテキストによるメールの使用頻度が高い。おしゃべり風の文字メールである。

情報検索は、まずインターネットから始まる。行動を起こすとき、まず情報が必要だが、そのときは、インターネットで検索するところから始まる。検索される側からすれば、インターネット上に顔を出しておかなければ、素通りされてしまうことになる。

今やインターネットは、あらゆる情報に対してデータベースの役割を果たしており、ケータイからであろうとパソコンからであろうと、インターネットへの接続は、行動を起こす前の情報検索として欠かせない存在になってきた。

情報が的確に入手できればよいが、溢れかえる膨大な情報からの的確な情報を得るのは至難のわざである。情報がありすぎると、フィルターが必要となる。該当する情報に既に通じている人、経験者、専門家などが身近におれば、その人たちに聞いてみるのがよい。指針なしに情報の洪水に乗り出せば、得るところが少なく、無価値な情報をつかんでしまうことが往々にして起こる。問題によっては、祖父母や親、先生や先輩などは、まだまだ頼りになる存在だと思うのであるが、そうした人々の知恵や経験が疎んじられてしまい勝ちとなる。

⑤ 「現実世界」のオンラインへの移行

現実世界の対面的なやり取りや手続きが、どんどんとオンラインに移行しつつある。今までなら銀行や証券会社の窓口で行っていた手続きが、オンラインに移行した例に見られるように、チケットの購入やショッピングなど、しかるべき場所で、対面で行ってきたさまざまな取引が、オンラインで行えるようになってきた。

政府が進めているe-Japan計画の電子政府化は、住民が手続きのために役所を訪れなくて済むようにしようと計画している。街角にある端末を使い、家でパソコンを操作しながら、済ましてしまうという計画が進んでいく。

確かに便利が良い、仕事の能率・効率が上がるという観点からすれば、そのとおりなのであるが、「現実世界」の方が心配になる。役所に足を運ばなくてもよいのは便利だが、役所の中を覗き見ることがなくてよいものであろうか、どんな人がどんな風に仕事をしているのか、その様子を全く知らないで済ませられるのであろうかと心配になる。

新聞や雑誌、パッケージ型のメディアの一部、CDの音楽やビデオの映像、テレビゲームなどもオンラインでの配信が現実化している。それらがどの程度オンラインに移行し、もとの形を留めて存在し続けるのか、その行方は未だよく分からない。

共通の趣味や関心で集まる集団も、オンライン上にそうしたグループを形成している。チャットや会議室を通じて、見知らぬ人同士のコミュニケーションが生まれている。参加メンバーが固定化すると、「オンライン・コミュニティ」と呼ばれている。現実の地域に限定されたコミュニティの概念から、空間に制約されないコミュニティの概念が提出されている。見知らぬ関係と言っても、多くはオフ・ラインで、1年に数回は直接出会う機会を設けているものが多い。普段の会話は、もっぱらメールで会議室に参加するということになる。それらは、もっぱら「オンライン・コミュニティ」と呼ばれているのだが、メンバーの間には、仲間意識や帰属意識、親密感も生じると言う。地域に限定された「現実世界」のコミュニティとは違って、ネット上に生まれる「オンライン・コミュニティ」が、どんな意味を持ってくるのか、これからの課題として考えてゆかねばならない。

⑥ バーバル・コミュニケーションの偏重

言葉のコミュニケーションの重要さは、今さら言うまでもないが、私たちの日常のコミュニケーションは、言葉によらない態度、表情、声の響きなど、ノンバーバルの部分で交わしているコミュニケーションが大きな比重を占めているのが普通である。しかし、このノンバーバルの部分に気がついていない人が増えてきたようである。

CMCによるコミュニケーションに慣れてくる、つまり間接的・分節的コミュニケーションの比重が高くなってくると、ノンバーバルな面でのコミュニケーションに問題が出てくるのではないかと気になる。相手の態度や表情から察するという能力が落ちてきているのではないかという問題である。

例えば、いじめの問題でも、新聞で紹介されるコメントで、学校側は「話をしてくれなかったから分からなかった」と言うし、親の方も「言ってくれてさえしておれば」と言う。子供と一緒に生活をしていても、親が多忙で子供の方に関心がいついていないと、子供の日常の態度や表情の変化に気がつかない。他者の態度や表情の変化を読み取る能力が減退してきているのではないかとと思われるのである。

⑦ 直接的コミュニケーションを避ける傾向

学生が書いてくれたレポートを読んでいて気になったことがある。「メディア世界」に深く依存する傾向のある人たちに、直接に人と会うことを避ける傾向が見られるということであった。もっとも、「現実世界」とのバランスが取れている人には、心配はないわけだが、メディア依存症的になると、見知らぬ人との初対面は苦手になってくるようである。「人前で話すのは苦手」「買い物で、店員から話しかけられるのは嫌」「友達が少ない」「初対面は苦手」と洩らすのである。

買い物をするとき、私などは、店員が寄ってきてくれれば、助かったと思い、いろんな質問を

するし、値段の交渉もできてよいなと思うのであるが、「初対面が苦手」という人は、店員が寄ってきたら逃げてしまうというのである。相手が「メディア世界」であれば、何の躊躇もなしに相手になるのに、生きた人間が前に立ちただかると、避けたいと思ってしまうわけである。

こういう人が現れてきていることを想定してか、「現実世界」のあり様も変化してきた。スーパーマーケットでの買い物では、バーコードのついた商品を買物籠に入れていくだけとなったし、銀行のATMも自動化しているし、電車の切符も自動販売、自動改札で、いたるところで自動化が進んでいる。買い物で値段の交渉をしようとしても、ポイント制の割引がセットされていて、店員との交渉ができなくなってきた。社会的場面で、生身の人間と話をする機会がますます少なくなってきた。その一方で、親切な店員を配置した専門店が人気を集めるという現象も見られるが、対面を避ける自動化の勢いが、情報化とともに盛んになってきたことは否めない。

7) コミュニケーション・バランス

① コミュニケーション・バランス

現代人のコミュニケーション・ライフの特徴を見てきたが、直接的な現実、対面的な関係よりもメディアを媒介としたコミュニケーションの比重が、非常に強く見られるようになってきたことが上げられる。つまり「メディア世界」に依存する比重が高まってきたということである。しかし、人間が健全な成長発展を遂げ、健康に生きていくためには、直接性の「現実世界」を欠かすことができない。自ずとそこに「コミュニケーション・バランス」というものが想定できるのではないか、というのが私の考え方である。

とりわけ、コンピュータを媒介としたコミュニケーション（CMC）の比重が高まってきて、さまざまな領域で、オンライン上でのサービスの提供、利用、購入、決済が行われだす。このプロセスは、迅速で大変便利で、生産の能率・効率が上がって、人手も省け、サービスをより安く提供できるので、いきおい普及していくこととなる。「メディア世界」の一層の拡大と深化がもたらされることになってきたわけである。

とは言いながら、私たちが生き物として、生物体として生き、五感を働かせ、自らが体験をし、対面コミュニケーションを交わして生きている「現実世界」の方も軽んじることはできない。私たちは、バランスの取れた生き方をしてこそ、社会的適応もはかれて、健全な生活が営めることができるのではないかと思うのである。

② 直接的な人間同士の「ふれあい」

人間の触覚、臭覚、味覚など、人間のすべての感覚をコンピュータ上に乗せ、現実にとってかわるバーチャル・リアリティの研究を進めている人たちもいるが、私は、「現実世界」と「メディア世界」の両者が存在し、そのときどきの時代の条件のなかで、どのようなバランスをとって生きていくか、ということが大事だという風に考える。

人間が生きていくのには、人々との直接的な「ふれあい」が欠かせない。「メディア世界」に移行ができない「ふれあい」がある。なぜ生身の人間同士のふれあいが大事なのか。

昨年、ロバート・B・ライシュという人の『勝者の代償』（原題：The Future of Success, 清家篤訳, 東洋経済新報社, 2002）という本が出版された。ライシュは、前の米大統領クリントン政権の労働長官をしていた元ハーバード大学教授だが、このなかでライシュは、カーネギー・メロン大学の研究者たちによるインターネット利用の心理的効果の研究を紹介している（同書285頁）。

無作為に抽出されたピッツバーグ地区の住民169人を対象に、彼らの行動を1年から2年にわたって追跡した。より多くの時間をインターネットに費やすと、より憂鬱で寂しい気持ちになるということが分かったと言う。彼らは、オンラインで時間を費やせば費やすほど、単純にそれだけ時間が少なくなるため、家族や友人との直接のやりとりが減ってしまったし、人間関係の質も低下したと言っている（同書285頁）。

カーネギー・メロン大学のヒューマン・コンピュータ・インタラクション研究所のロバート・クラウト教授は言う。「フェイス・トゥ・フェイスの接触を伴わない遠距離の付き合いは、通常のフェイス・トゥ・フェイスの付き合いがもたらしてくれる精神的安心感や幸福感につながるようなある種の支えや互恵をもたらさないのです」（同書285頁）。

人間の直接的ふれあいが身体的・精神的健康にとって、なぜ重要なのかについての科学的根拠ということになると、まだ正確には分かっていないのだが、脳の研究をする神経科学者は、次のように推測する。

他人から積極的に気配りをしてもらおうと、通常はストレスと結びつくようなホルモン、特にエピネフリン、ノルエピネフリン、コルチゾールが減少する（同書286頁）。

やさしく揺り動かされたりマッサージをしてもらったりした幼児の尿は、そのようにしてもらわなかった幼児の尿よりも、これらのストレスホルモンの含有率は低かった（同書286頁）。

人とのふれあいや気配りをより多く受けた男性高齢者の尿は、そうされなかった男性高齢者よりもエピネフリン、ノルエピネフリン、コルチゾールの量が低かった（同書286頁）、というのである。

②笑顔と笑いの重要性

人間という生物体の「神秘」はまだまだ分からないことが一杯である。「ふれあい」があった場合とない場合のストレスホルモンの量的比較で、その違いが指摘されるわけであるが、なぜストレスホルモンの分泌に違いが出るのかは分からないままだ。

笑いの場合も同様で、大いに笑ったら身体の中の免疫機能を持つNK細胞が活性化するとか、微笑みは抗酸化作用をもつホルモンであるメラトニンの脳内での分泌を促し、動脈硬化の予防が期待できるとか、よく笑う人の唾液には、風邪予防の免疫物質イムノグロブリンAが多いとか、といった知見が発表されている。しかし、微笑んだり笑ったりすると、何故そうした生理的反応が生じるのかについては、未だ分からないままである。

笑顔と笑いのことを考えるのに、「現実世界」での笑い「メディア世界」での笑いの問題について考えておきたい。

電話やテレビ電話などを介しても、笑いあうことは可能である。しかし、直接の対面型のようにはいかない。相手の全体が見えて、肩をたたきあったり、手を打ち合ったりというわけにはいかない。赤ちゃんをあやしたり、子供の相手をしたりは、電話ではかなわない。赤ちゃん時代の親との「あやし・あやされ」の直接的な関係は、子供の成長発展にとってとても大事なことである。

電子メールになると、文字に託して、時には絵文字に託して、笑いのメッセージを送ることはできるが、直接会っているかのようにはいかない。笑っているよ、怒ってはいないよというメッセージを伝えることはできるが、それ以上はむずかしい。もちろん、ジョークや洒落を送って笑わせるということはできるが、それ以上に「ふれあい」をもたらすことはできない。

相手がいて、直接的なフェイス・トゥ・フェイスの関係だと、表情、言葉、態度、ふれあいとバーバルとノンバーバルを問わず、すべての手段を動員してコミュニケーションがはかれる。そのなかで、お互いが笑顔でもって、ともに笑いあうことができる関係をもつと、緊張は解け、気持ちはほぐれ、明るく楽になる。親密感も増すし、グルーブだと一体感も増す。先のストレスホルモンも低下するに違いない。

テレビのお笑い番組を見て、大いに笑うということがある。双方向であれ片方向であれ、大いに笑った方がよいわけである。笑いは、生理学的にもポジティブな変化を生み出してくれるわけで、笑った方がよいというのは言うまでもない。子供がお笑い番組を見て大笑いしていると、親が「何をくだらない番組をみているのだ」と叱りつける親がいるが、子供も笑う理由があるわけで、笑わせておく必要がある。

漫才・落語もテレビで見ても、そんなに大きく笑えないが、現実の寄席に出向き、大勢の観客の中にいると、どうしてこんなに違うのかと思えるほどに爆笑してしまう。テレビで「吉本新喜劇」を知ったかぶりになっている子供を、実際に吉本の「なんばグランド花月」に連れて行くと、笑い方が明らかに違うし、劇場の面白さを知ることになる。

子供たちには、「メディア世界」の利便性の教育と同時に、劇場や美術館、野球場やサッカー場、そして大自然の「現実世界」の体験を与えることを忘れるべきではない。

お寺を訪問して、観音像の何ともいえない微笑に触れると、こころが癒されたような気持ちになる。周りの静けさや寺院独特の匂い、薄闇のなかで光を受けた輝きなど、現場では、それらの全てを感じ取って、仏さんの微笑を受け取り、こころを和ませる。優秀なカメラマンが撮影した写真は、その微笑をよく伝えるであろうが、現場から切り取られた断片は、現場に取って代わることはできない。

ブロードバンドの時代は、「メディア世界」の比重が、否が応でも高まっていく。コミュニケーションは、ますます多く、メディアに依存するようになる。それだけにメディアに振り回されないようにということで、「メディア・リテラシー」を身につけることが要請されている。しかし、それだけでは、ブロードバンド時代を生きていくのは難しい。「現実世界」と「メディア

世界」とをトータルにとらえた「コミュニケーション・ライフ」という考え方、そしてその両者にまたがるコミュニケーションのバランスが、とれているのかどうかという「コミュニケーション・バランス」という概念が重要になってくると思う。

ではどのようにして、そのバランスをはかるのか、何か量的な目安があるのかというと、そうした尺度を作り出すことはできない。当人が、自らのコミュニケーション・ライフを反省して、当人が納得できる状態であれば良いということになろう。反省と自覚をするためには、まずこうした「コミュニケーション・ライフ」とか「コミュニケーション・バランス」という概念の自覚が必要である。こうした概念の自覚なしには、反省のしようもないわけだ。ネガティブな症候を点検するためにも「コミュニケーション・バランス」という概念を自覚しておくことが肝要である。自らの「コミュニケーション・ライフ」の診断に、「コミュニケーション・バランス」の考え方が使えると思う。

「メディア世界」をたくみに活用し、その豊かさを手に入れながら、自らの感覚器官、身体感覚、「現実世界」での経験・体験をないがしろにせず、自らの「現実世界」が貧弱なものにならないよう心していかなければならない。そのバランス感覚を持ち合わせることで、これからの時代にあって重要さを増すものと思われる。（完）